



発行日 令和元年7月8日

発行者

富山・ミラノデザイン交流倶楽部

高岡市オフィスパーク 5

公益社団法人富山県デザイン協会内

TEL.0766-63-7140

執筆 池田美雪 * ミラノ在住

第58回ミラノサローネ国際家具見本市

「増加する動員数と成長するビジネス」

4月9日より14日までの6日間、第58回ミラノサローネ国際家具見本市(以下、ミラノサローネ)がミラノ・ロー国際展示会場にて、隔年の展示会であるEUROLUCE(照明機器)とWorkplace3.0(オフィス関連)を併合して開催された。来場者総数は、181カ国から38万6236人、2年前に開催された同じ併催内容の年に比べ12%の増加がみられた。毎年開催される、Salone Internazionale del Mobil, Salone Internazionale del Complemento d'Arredoと今年初めて開催されたS.Projectも加え、計2418社が出展、そのうち34%がイタリア国外43カ国からの企業であった。また、SaloneSatelliteへは世界各国から550人の若手デザイナーが出展。例年にも増して、初日から熱気あふれる会場となった。

開催に先駆け2月14日、ミラノトリエンナーレ美術館のSalone d'Onore(栄誉の間)において、ミラノサローネ記者発表会が行われた。今年コンセプトは「新しい展示空間とレオナルド・ダ・ヴィンチへのオマージュ」。

Alberto Bonisoli文化財・文化活動省大臣は、ミラノサローネがミラノトリエンナーレ美術館と協力して、ミラノに本格的なデザインミュージアムを設立する構想に対し、プロジェクト促進のために政府が1千万ユーロを投資すると宣言。ミラノ市長Giuseppe Salaは、3年後に60周年を迎えるミラノサローネとミラノ・スカラ座が今年から3年間提携を結ぶことを発表すると同時に、ミラノサローネとミラノ市の密接なパートナーシップの大切さを強調した。彼らに続き、ミラノトリエンナーレ美術館々長Stefano Boeri、イタリア家具工業連盟会長Emanuele Orsini、ミラノサローネのプレジデントClaudio Luti、それぞれが今年の抱負を語った。

昨年宣言されたマニフェストへ、ダ・ヴィンチへのオマージュとして新たに「Ingegno(創意工夫)」が加えられた。このイベントとミラノ市は、参加企業やデザイナーにとってミラノが今後さらに国際的なデザイン交流の場となるように、その方向性を示した。例年以上にとってもわかりやすい記者発表会であった。

下記リンクより、開幕の様子と展示会場の概要をまとめたビデオをご覧ください。

youtu.be/a5fj8v8pzek



4月9日、見本市初日の正面エントランスの様子。



Salone del Mobile.Milano提供 撮影・Andrea Mariani

マニフェストに新しく加えられた「Ingegno(創意工夫)」について語るミラノサローネ・プレジデントClaudio Luti。



Salone del Mobile.Milano提供 撮影・Andrea Mariani

レオナルド・ダ・ヴィンチ没後500周年を記念して、ミラノ市内で開催されたイベント「ACQUA」をプレゼンテーションするアートディレクターMarco Balich(右)。

「S.Project」 - 市場の要求に応えるマルチセクター

今年新たに設けられたS.Projectは、「マルチセクター」をキーワードに、インテリアデザインの装飾と技術にフォーカスを当てた展示エリアとして誕生。2つのパビリオンを合わせて約1万4千平米に及ぶ展示会場へは、Abet Laminati、Boffi、Flos、MARUNI、Olivari B、Wall&Decòなど、選び抜かれた業界トップの家具メーカー、建材やインテリア装飾関連企業など84社が出展した。実際に会場を歩いて回ると、これまで見てきた家具メーカーの展示方法とはどこか違う多様なアイデアを駆使したひねりのある展示が多く目に止まった。インテリアデザインからアウトドア、ウェルネス製品からファブリック、照明から音響ソリューション、コーティングから仕上げまで、建築インテリアを包括的かつ詳細に捉え、単独のメーカー展示ではなし得ないだろう、温かみのある日常に寄り添った展示という印象を受けた。

下記リンクより、会場の様子を紹介するビデオをご覧ください。

youtu.be/zBtiZBWwAzo



MISSONI HOME社は、家具やカーテン、カーペットに応用した色彩の美しいファブリックを展開。



Salone del Mobile.Milano提供 撮影・Saverio Lombardi Vallauri
他社の製品とコーディネートし豊かな食卓空間を提案する、FRITZ HANSEN社の展示の様子。



Salone del Mobile.Milano提供 撮影・Saverio Lombardi Vallauri
テントやビーチパラソルなど、エクステリアの生地メーカーSUNBREL-LA社の展示。

「DE-SIGNO」 - レオナルド・ダ・ヴィンチに捧げるインスタレーション

今年は、レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452-1519)の没後500周年にあたる。ダ・ヴィンチは、ミラノで過ごした約20年間(1482-1499)、ミラノ公に仕え、壁画「最後の晚餐」や水に関わる画期的なシステムを発案するなど後世に残る傑作を生み出すと同時に、デザインの文化も開花させた。その偉業を称え、サローネ期間中に2つのイベントが開催された。

1つは本会場内パビリオン24号館に設置されたインスタレーション「DE-SIGNO」。ちなみにdesignという単語は、イタリア語のdisegnoから派生し、それはラテン語のdesigno(設計する/計画するの意)に由来する。このインスタレーションは、Da Vinciがミラノの街へ文化遺産として残したデザイン力と実行力を称賛し、彼が生きたルネッサンス時代のイタリアのデザイン文化と現代とを比較するというコンセプト。インスタレーションはミラノエキスポでパビリオンゼロのキュレーターを務めた映画監督Davide Rampelloが担い、八角形に形どられたスペースに設置された4つの大型スクリーンから、2つの時代のイタリアデザイン文化が美しい映像と音楽によって映し出された。初日は、Matteo Salviniイタリア内務大臣により華々しくテープカットが行なわれた。

下記リンクより、インスタレーション「DE-SIGNO」のダイジェストビデオをご覧ください。

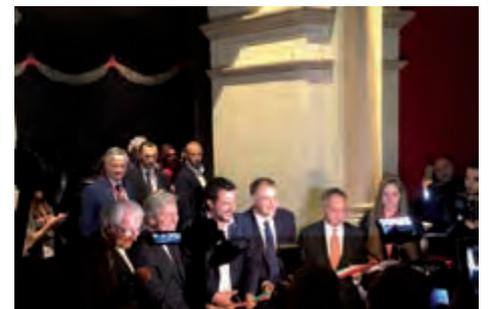
youtu.be/Ctd_D2UE_vl



Salone del Mobile.Milano提供 撮影・Saverio Lombardi Vallauri
高さ6m、幅3mの記念碑的な景観を持つエントランスと会場外観。



大型スクリーンに映し出されるレオナルド・ダ・ヴィンチの作品の数々。



初日に「DE-SIGNO」エントランス前で行われたテープカットの様子。

「ACQUA」 - ルネッサンス時代と未来のミラノ

もう一つのイベントは、San Marco通りの北端に現在も保存されている、Conca dell'incoronata(インコロナータの小さなダム)内で開催されたインスタレーション「ACQUA(水)」。1482年に、フィレンツェからミラノに移り住んだばかりのダ・ヴィンチが、2つの異なる水位の運河を結ぶ為に発明した木製の扉があることで知られている場所。かつてはこの扉のおかげで、運河を通してミラノ市内とコモ湖を船で行き来することができた。

インスタレーションは、数々のオリンピック式典やミラノエキスポなどでアートディレクションを手がけてきたMarco Balichとミラノサローネが共同で制作。地上に小さなダムを再現し、水上に電気エネルギーによるボートのプロトタイプを展示。これは将来ミラノが水上交通網によって渋滞のない街となる、というビジョンを象徴している。広くメディアに紹介されたイベントとだけあって、早朝から長蛇の列ができています。

運河まで階段を降りて行くと、ダ・ヴィンチが手がけた水に関する研究・発明を展示するエリアにたどり着く。その後、2015年に修復された木製の扉の間を通して、水の様々な要素を最先端技術を駆使して表現したインスタレーションの空間へと入る。天井から流れ落ちる水と、スクリーンに映し出されるダ・ヴィンチの作品映像が、過去と現在をクロスさせる不思議な体験であった。

下記リンクより、2つのイベントをディレクションしたキュレーターへのインタビューとプロジェクトの画像をご覧ください。
youtu.be/Q0LVJzx11uo

下記リンクより、インスタレーション「ACQUA」のトレーラービデオをご覧ください。
youtu.be/REgtyr3K6l4



Salone del Mobile.Milano提供 撮影・Andrea Mariani

ミラノの未来の交通手段、シェアボートのプロトタイプと数十年後のスカイラインを描いたLEDパネル。



ダ・ヴィンチが研究を行なった、運河のシステムに関する展示。



Salone del Mobile.Milano提供 撮影・Andrea Mariani

1482年にダ・ヴィンチが発案し、1496年に実現させた2つの運河の水位差を解消する木製の扉。

第22回サローネサテリテ - デザインオブジェクトとしての食

ミラノサローネのハイライトは、毎年企画が異なる特別展示とサローネサテリテだと常々思っている。新鮮なテーマを掲げ、世界中から選り抜かれた数百名の若手デザイナーを一気に披露するこの場は、出展者と来場者の間に心地良い緊張感を漂わせる。今年はS.Projectと同じパビリオンの奥に約3千平米の展示スペースが設置され、「FOOD as a DESIGN OBJECT (食がデザインオブジェクト)」をタイトルに、食が持つ様々な側面とデザインの関係性を新しい切り口から見直した考察が展開された。会場内に点在するこのテーマを表現したパネルの中で、興味をそそられたのはグリーンピースのサヤの考察「異なった直径の粒がエレガントなフォルム、カラー、素材によって簡単に開くことができる袋に収められている。サヤの形状はシンメトリーで、中に収まる粒の数は前もって決められており、まさに製造コストを考慮してデザインがなされる現代の理論を具現化している」と。自然の中に優れたデザインへのヒントが隠されている、というメッセージを発信していた。

出展者を決める選考は、毎年非常に競争率が高いことが知られているが、今年は特に慎重で厳格に行なわれた為、落選者も多く出たとのこと。そうした経緯で出展権を獲得した作品はレベルが高く、デザインの方向性も多岐にわたり、魅力のある作品に多く出会った。しばらく日本からの出展が低迷していたが、今年はなんと14ブースでの出展があった。

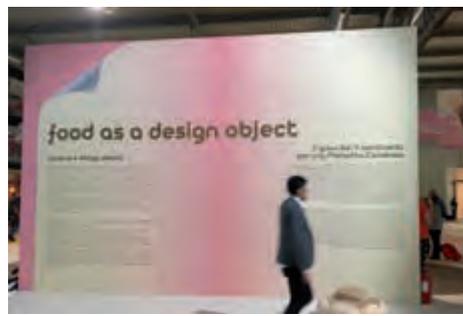
ブースごとに作品を丁寧に見て回る。ブースで立ち止まるか否かは自分の好みによるところもあるが、新鮮に感じた作品をいくつか紹介したい。



サローネサテリテの選考委員を長年務めたAlessandro Mendiniへのオマージュ。



Salone del Mobile.Milano提供 撮影・Ludovica Mangini
第10回ミラノサローネサテリテ・アワードへの出展作品、展示エリア。



「デザインオブジェクトとしての食」を説明するパネル。



食糧危機を救う食材として、昆虫が注目されている。

エジプトから出展のYASMINA MAKRAM STUDIO(yasminamakram.com)は、クラシックな素材のラタンを背もたれと座の部分に用い、この2つの部分を取り外せるシステムによって、コンパクトに持ち運びができるビーチチェアを考案。砂浜でも安定感のある脚部のフォルムやラタンの適度な伸縮性と通気性などの機能性をもたせることで、伝統的な編みの技術をリニューアルした作品。オランダのSTUDIO DARIUS BLOKKERは、力強いメタルの素材感を前面に打ち出した作品を展示。細い鉄棒を平面に並べ溶接し、表面を研磨したのち、テーブルや壁面装飾、照明器具に応用。圧倒的にインパクトの強いブースであった。YELLOWDOT DESIGNは香港で活動するデザインデュオ。既存のカテゴリーにないものを作り出すことをコンセプトにしているだけあって、展示されたパーティションは独特な切り口でとても詩的な作品と感じた。アーチ型にくり抜いた2枚合わせのパネルの中に、伸縮性のある透明フィルムで思い出のオブジェを閉じ込める機能を持たせるというアイデア。パネルはモジュール式で、空間に合わせて大きさを変えられる。思わず近づいて細部を長らく観察したのは、ポーランドのデザイナーCYRYL ZOKRZEWSKI(cyrylzakrzewski.com)の棚。何重にも重ねられた樺の合板を自らの手で削り出し、有機的な形状を生み出した棚や椅子、テーブル。その中の一つ「(DUNE)砂漠」チェアは、常に形を変える砂漠の砂をイメージした作品で、洗練された表面の仕上がりがとても印象的であった。シャープなフォルムを生かしたミニマルな空間を設計するベルギーのOLIVER VITRY FOR CLAISSE ARCHITECTURE(claisse-architectures.be/en)は、テーブルの天板と脚部の接続パーツのデザインを展示。建築的なアプローチをディテールに落とし込んだ精密な仕上がり。



YASMINA MAKRAM STUDIOがデザインした「Nü chair」。天然素材だけを使った機能性のあるビーチチェア。



STUDIO DARIUS BLOKKERのブースでは、芸術的なメタルの作品が異彩を放っていた。



YELLOWDOT DESIGNのポエティックなパーティションシステム。サテリテ会場を包むパステルトーンのカラーと同調していた。



洗練された有機的フォルムが美しい、CYRYL ZOKRZEWSKIの作品。



OLIVER VITRY FOR CLAISSE ARCHITECTUREがデザインした天板と脚部を接続するパーツは、石、コルク、セメントの3種類のバリエーションがある。

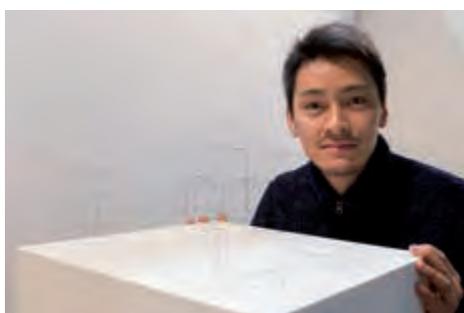


第10回サローネサテリテ・アワード1位を獲得した、Kuli-Kuliの「Kobe Leatherプロジェクト」の展示ブース。

神戸を拠点に活動するKuli-KuliのKobe Leatherプロジェクトが、サローネサテリテ・アワード1位を受賞した。こじんまりとしたブースでの展示だったが、展示作品の完成度に興味をそそられ立ち止まって話を聞いた。神戸の鞣し業者と協力して、展示作品に見られる皮革の特殊加工を開発したとのこと。発端は、廃棄される神戸牛の皮を再利用したいというデザイナーの思いだったという。展示されていたプロジェクトは立体加工を施したカードケース、形状記憶加工を施したバッグ、温度によって色が変わるポーチの3点と木の玩具。今年のテーマ「食」に直結するプロジェクトでもあり、素材のリサイクルへの取り組みとその可能性を追求したことが受賞につながった。フィリピン出身、ミラノを拠点に活動するSTUDIO MIREIはNebulaランプで特別賞を受賞。バナナの繊維から織られている布が柔らかい光を放つランプシェードは、その素材の研究が評価された。その他の受賞作品は、2位がドイツのSTUDIO PHILIPP HAINKEが制作したHALOチェア。オーガニック研究プロジェクトで開発されたカナパとカゼイン繊維から作られた軽量素材の強さと可能性を実証した作品で、デザインに必要な要素がすべて研究されていることが評価された。3位は日本人デザイナー坂下麦が制作した2.5 DIMENSIONAL OBJECTS。0.3ミリというごく細いワイヤーによって作り出された錯視は、洗練された芸術的な要素を持ち合わせ、開発と応用に可能性が見出されることが評価された。



Salone del Mobile, Milano提供 撮影・Ludovica Mangini
2位を受賞したSTUDIO PHILIPP HAINKEとHALOチェア。



Salone del Mobile, Milano提供 撮影・Ludovica Mangini
3位を受賞した坂下麦と2.5 DIMENSIONAL OBJECTS。



特別賞を受賞したSTUDIO MIREI制作のNebulaランプ。

フォーリサローネ

ミラノ市内で行なわれるイベントのエリアは大きく分けて6つある。すべてをつぶさに見て回ることは時間的に難しいので、毎年エリアをいくつか絞る。今年は、面白そうなイベントが集まるBRERA District、TORTONA地区、5Vie、大聖堂周辺を選んだ。その中で、強く印象に残ったイベントをお伝えしたい。

数々のイベントの中でも特に感銘を受けたのは、「空気」の新しい感じ方を生み出すことをコンセプトにnendoが手がけたダイキンのインスタレーション「breeze of light」。会場に足を踏み入れると、目の前に真っ白な空間が広がる。花形に切り抜かれた偏光フィルム約17,000本が敷き詰められ、その間を通路が緩やかにカーブを描く。天井から115個の偏光フィルター付きのスポット照明が当てられ、ゆったりとした時間の中で照明の2層の偏光板が角度を変え、花の影が濃くなったり和らいだり消えたりする。花の向きは一様に同じだが、高さがひとつひとつ異なることで、空間全体がまるで風によって滑らかに波打つような印象を生んでいた。

下記リンクより、「breeze of light」のビデオをご覧ください。

youtu.be/iuHjburMx4U

エネルギー溢れるWhole Love Kyoto(wholelovekyoto.jp)は、京都の伝統工芸を愛し尊重し発信していくプラットフォームとして、地元の芸術大学の学生たちによって立ち上げられたプロジェクト。TORTONA地区にあるSuper Studio内の共同展示スペースの一角に、直径2mに及ぶ京提灯を展示。話を聞かせてくれた女子学生は、スニーカーに鼻緒をデザインしたHANA O SHOESを履き、京提灯の老舗問屋・美濃利の職人と共同制作したCHOCHIN CAPをかぶって体全体で京都をアピールしていた。リサーチや職人さんへのインタビューを行ない、彼らと交流する中からアイデアが生まれるそうだ。彼らが企画した商品は国外でも販売が始まり、これからどのように発展していくのが楽しみなプロジェクトである。



www.nendo.jp

nendoが手がけた、ダイキンのインスタレーション「breeze of light」の全景。



Whole Love Kyotoが展示した京提灯。



暖簾で日本の空気を再現するINAX社の展示ブース。

広い展示スペースを持つSuper Studioでは、日本からの複数の展示が見られた。今年で4回目の出展となる日本の若いクリエイターを育成するプロジェクトbud brandは、「旅」を100倍楽しませる日本のデザインをテーマに、コンペを通過した作品を展示。一つ一つの作品に独創性があり来場者を楽しませていた。YOKOHAMA MAKERS VILLAGEは「IKIMONO」と題し、自然のエネルギーを活用したり自然界に存在する機能からヒントを得たインテリア小物を展示。家具メーカーADAL社は、い草を西洋のライフスタイルに落とし込んだ家具を発表。暖簾や枡を装飾に使い、自社製品の展示空間に日本の空気を再現したINAX社。そのどのブースにも日本人ならではのセンスと技術が見られ、多くの来場者の注目を浴びていた。

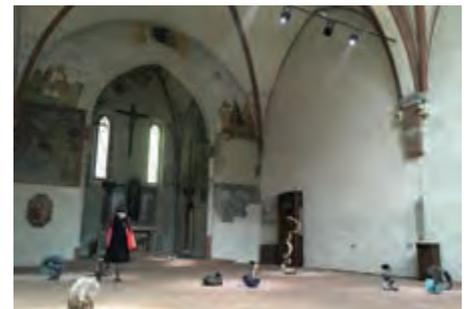
クリエイティブ活動の実験を促進する5Vie地区は、年々包括エリアが広がっている。展示が集中する2つのエリアを結ぶ静かな小道にあるSan Bernardino alle monache教会内部では、スウェーデン/チリ人アーティストAnton Alvarezのインスタレーション「L'ultima cera」が設置された。奥行きのある色彩とブロンズの質感が時を経たフレスコ画と呼応し、時空を超えた空気を作り出していた。ミラノの守護聖人を祀るSant'Ambrogio教会の礼拝堂で開催された、レバノン人アーティストCarlo Massoudのエキシビジョン「Il Pesce e gli Astanti」は、大理石のプレートを重ねて形作られた大きな魚が静かに何かを物語っていた。通常は入れないローマ時代の遺跡が残る職人養成校SIAMの地下空間では、イタリア人アーティストRoberto Sironiのインスタレーション「Human Code」を開催。ホモ・サピエンスの歴史の中で、未だ残る遺伝コードからヒントを得て制作した作品の数々。これら歴史を経た空間とエネルギー溢れる若手アーティストの作品のシナジーは、サローネ開催期間だからこそ感じることができる。



bud brand Award 2019準グランプリを受賞した甲冑ブランケット。



ローマ時代の遺跡が残る地下に展示されたインスタレーション「Human Code」。



後期ゴシック様式の教会内に設置されたAnton Alvarezのインスタレーション。



iGuzzini社ショールームで行なわれたライティングのライブショー。

BRERA地区は、BOFFI、MISSONI HOME、BISAZZAなど有名メーカーのショールームが並び、又、見応えのある歴史的建造物が展示会場として使われることもあり、毎年多くの人で賑わう。EUROLUCEが併設された今年、世界のトップメーカーiGUZZINI社が、文化と光をプロモートする自社ショールームで、TheLightGateと題したイベントを開催した。ミラノのデザインスクールCreative Academy - Richemontの学生が、伝統技術を持つ職人の指導を受け制作した作品を展示したエキシビジョン「UN-REVEALED」と、来場者に照明を体感させるデジタルビジョンのライブショー、いずれもガイドに誘導されての閲覧だったためか、イベント企画の奥行きを感じた。

ミラノ市が2026年冬季オリンピックの共同開催地に決定したこともあり、ミラノサローネとミラノ市がパートナーシップを組み、今後、世界に何を発信していくのか楽しみだ。来年の開催期間は4月21日から26日まで。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー

武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒

Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒

1994年よりミラノ在住

個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わったのち、
2005年より

クリエイティブ・コンサルティング会社（デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン）の共同経営者として活動
デザイン・アートに関するコーディネイト、翻訳および通訳

日本とイタリアの文化交流を推進するデザイン・プロジェクト”stu-art”コーディネイター

mikeda.it